第2章

まちに住む

商店街はまちのヘソ。元気でなければ

❖西区／藤棚

内野十三男さん(62)

焼け跡の露店からの出発

「昔は正月用品の買い出しといえば、横浜一円の人は必ず藤棚へ来たものです。もよりの相鉄線西横浜駅に電車が到着するたび、商店街へ訪れるお客さんがざっと二百人は押し寄せましたからね」

こう語るのは、藤棚商店街で「シューズうちの」を営んでいる内野十三男さん。商店街の盛衰と再生を、文字通り正面から受け止めてきた二代目である。

「ここは戦災からいち早く復興したまちで、接収にもあわずにすみましたから、他の地区で接収された人がみんなここに集まり、戸板を並べて商売を始めましてね。それが藤棚地区商店街の始まりなんですよ」

内野さんのご両親も、もとは保土ケ谷区天王町で下駄屋さんを営んでいたが、接収により昭和二十二年にこの藤棚に移り住んだ。最初は露店からの出発だったが、二十六年に区画整理により商店街が整備されると、現在の場所に店舗を構えることができたという。

横浜開港時の歴史跡をそこここに止める西区にあって、藤棚は早くから開けたところ。横浜の中でも下町の風情の色濃く残る、庶民的なまちである。

藤棚商店街の活性化に取り組む内野さん

"へそまつり"は、商店街と地域の振興を目的としたユニークな行事

●まちの名の由来●

藤棚…市電停留所脇に店を構えていた鈴木屋という茶屋の軒先にあった藤棚に由来する。

まちの中心は、昔の街道沿いに伸びる商店街。その藤棚地区商店街は、西前商店街、藤棚一番街、藤棚商店街など五つの商店街が、藤棚交差点を中心に細長く軒を連ね、その数、およそ二〇〇店舗をかぞえている。内野さんは、十四年前からその藤棚地区商店街組合連合会の会長を引き受けてきた。

商店街の地域間競争は厳しい。戦後の一時期、伊勢佐木町に替わって横浜きっての広域商店街として栄えたのは、この藤棚であった。品物を並べれば売れた戦後の混乱期を経て、藤棚の商店街は最盛期を迎える。豊富な品揃えと、安さが評判だったという。

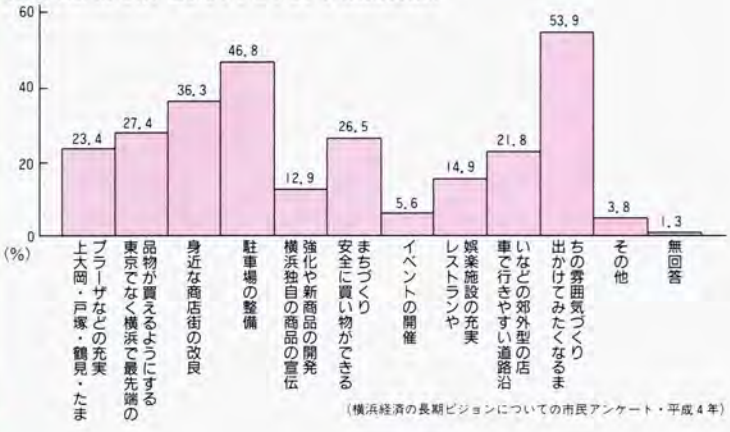
やがて各地で復興や開発によって商店街が整い、商圏が分散。昭和三十年代から横浜駅西口に次々に大型店舗がオープンすると、潮が引くようにお客が来なくなった。藤棚は"横浜の商店街"から"地元の商店街"に変身せざるを得なくなる。

まちの活性化はハードとソフトの両面から

内野さんが連合会の会長を引き受けたのは、藤棚がどんどん凋落を続けていた最中だった。その頃の心境を内野さんは「真綿で首を締められるようでしたね」という。ある日ドカンと来たわけではないので、商店の人たちの実感も薄く、対応が遅れた。

大型店舗に立ち向かう有効な手立てがみつからないまま日は過ぎる。人情が厚く、地域の活動に熱心だった人々も、商店街の低迷に合わせるかのように、余裕がなくなって、無関心になってきた。内野さんは正念場を迎える。

●2010年に向けての、望ましいショッピング環境の実現策



（横浜経済の長期ビジョンについての市民アンケート・平成4年）

近代化でモダンな雰囲気に生まれ変わった藤棚商店街。右はかつての姿

「商店街は地域の中心。商店街が元気になれば、まちもさびれることはありません。そこで商店街が活気を取り戻すには、藤棚を魅力ある商店街につくりかえるほかはないという結論に達したんです」

昭和六十二年、連合会がまず取り組んだのは、商店街の近代化である。アーケードを取り外し、道路をモール化、さらに電柱を廃して電線を地中に埋設。下町の雰囲気を生かしつつ、明るくモダンな商店街に変身させた。ぶらぶら歩きの楽しさを味わってもらえるような商店街にという狙いは当たって、評判も上々。商店街を訪れる人は確実に増えはじめた。

また、内野さんたちはまちおこしと地域との交流を目的に、昭和六十二年から市の助成を受けて、連合会主催による「へそ祭り」を行っている。これは毎年十月に開催されるもので、商店、地域、学校が一体となって参加。幼児からお年寄りまで千人規模の大パレードのほか、産直市やカラオケ大会などさまざまな催しが行われ、たくさんの人出を呼んでいる。〝へそ〟とは、かつてこの地域が横浜の中心として栄えたことにちなんだもので、往時の勢いを取り戻そうとの願いも込められているそうだ。

商店街の目下の悩みは後継者難。「若い人はじっとお客を待つような仕事は継ぎたがらないんです」と、商店街の明日を託すべき次世代が育たない現状に、連合会は頭を痛めている。唯一の光は、洋服屋さんなど手仕事がものをいう商売には若い人が戻ってきていること。

「これからは若い人も巻き込んでまちづくりの仲間を増やしたいですね。藤棚には西前の縁日や甘酒地蔵などの下町情緒あふれる観光資源も豊富です。若い人にも、そうした場所を一緒に楽しんでもらえるようなまちにしたいんです」

高齢化の著しい西区であるが、藤棚が「お年寄りの原宿」と呼ばれるようではちょっと寂しいという内野さん、まちの若い世代に大いに期待している。

●2010年のショッピング像

横浜経済の長期ビジョンについての市民アンケート・平成4年

		身近な場所で買い物が楽しめるまちを増やす	充実し、買い物客が増える横浜駅周辺の店が更に	その他	無回答
全体		59.7	20.5	18.5	1.3
住所	鶴見区	48.4	25.8	25.8	−
	神奈川区	48.3	31.0	17.2	3.4
	西区	70.0	20.0	10.0	−
	中区	21.1	68.4	10.6	−
	南区	60.0	12.0	28.0	−
	港南区	68.4	18.4	13.1	−
	保土ヶ谷区	42.9	28.6	28.6	−
	旭区	54.5	21.2	24.2	−
	磯子区	50.0	37.5	12.5	−
	金沢区	62.5	18.8	15.7	3.1
	港北区	70.0	6.0	24.0	−
	緑区（緑区役所管轄）	65.2	8.7	17.4	8.7
	緑区（北部支所管轄）	80.0	8.0	12.0	−
	戸塚区	67.6	11.8	17.6	2.9
	栄区	61.1	22.2	16.7	−
	泉区	83.3	11.1	5.6	−
	瀬谷区	52.9	35.3	11.8	−
	無回答	33.3	−	−	33.3

第2章

まちに住む

自分が働き住むまち（まち）だから大切にしたい

❖鶴見区／生麦

長柄　覚さん(34)

増える新住民

駅から三分、会社に七分。近くに海あり、山川もあり。こんな最高の環境で暮らしているのが、キリンビール（株）横浜工場でビールの開発を担当している長柄覚さん。京浜急行生麦駅近くの会社の独身寮に住む長柄さんは、歩いてご町内通勤の毎日である。

そこが生きているまちなら、人の出入りは自然の流れ。とはいっても、とかく新旧住民の間は疎遠になりがちである。特に入ってきたのが若い人の場合、地域への無関心は当たり前となっている。そこで、独身新住民代表として、古いまちに住むことになった長柄さんに、その生活と意見を聞いてみた。

京浜工業地帯に位置する鶴見区は、JRの線路をはさんで山側が住宅地、海側が工場街と二つに分かれて発展してきた。近年は、産業構造の変化などにより工場移転した企業の跡地にマンションが立ち並び、新しい住民が年々増加の傾向にある。

「よこはま三万人アンケート」では、住んでいる地域のよい点はどんなところかという質問に、鶴見区民の六割以上が通勤・通学の便がよいことをあげている。横浜にも東京にも近い便利さだけが、このまちの魅力なのだろうか。

「このまちの第一印象は、飲み屋さんが多いなということ（笑）。もっと都会的で冷淡なところかと思っていたのに、下町ふうの人情があって、まとまりがよく、全体に粋な感じがしましたね。お祭りが多いのも驚きでした」

石川県出身の長柄さんにとって、関東で暮らすのは初めての経験である。それだけに、不安も大きかったようだ。長柄さんが生麦に住み始めたのは、いまから五年ほど前のこと。転勤でここ生麦寮に移ってきた。

年々、新住民が流入する鶴見区にあって、古くからの家並みがぎっしり立ち並ぶ生麦は、さしづめ鶴見の下町。古くは生麦事件の舞台として教科書にも登場している由緒ある（?）土地柄だが、いまは魚屋さんが多数軒を連ねる横浜の〝築地〟とでもいうべき生麦魚河岸通りでも有名な、往年の漁村の雰囲気をよく残すまちである。

では、長柄さんのふだんの一日の生活パターンは?

「まず、朝は七時頃に起きて朝食をとり、八時十五分には寮を出ます。うちの会社はフレックスタイムなんですが、八時半には職場に入るようにしています。勤務はだいたい夕方の六～七時頃まで。その後はまっすぐ寮に帰るか、生麦駅周辺の店に飲みに

近年、急速に増えたのがマンション。移り変わるまちの姿を象徴している

慢性的な渋滞で混雑する第一京浜国道。沿道では排気ガスによる大気汚染の問題も深刻化しつつある

生麦魚河岸通りは、かつて漁村だった頃の面影を色濃く残している

●まちの名の由来●

生麦…旧村名から採った。地名研究では「砂丘のむき出しになっている地形」を意味するという。

生麦のよさを語り、そして別のまちで新たな人生のスタートをきる長柄さん

いくか。飲みにいくのは週に三～四回ですが、この辺りの店は閉店が早いので、たいてい夜十時頃には寮に戻りますね」

大学時代はダンス部に在籍していたという長柄さん。休日はどう過ごしているのだろう。

「休日は寮でテレビを見ているか、会社のコートでテニス。ミュージカルが好きなので、観劇はどうしても東京ということになりますね」

「蛇も蚊も祭り」は鶴見区に伝わる伝統的なお祭り。地域にとってはかけがえのない文化的財産でもある

積極的に地域に溶け込む

生麦の住人となった五年前に比べ、まちのようすで変わった点といえばマンションが増えたことくらい。人と人との挨拶の声が絶えないまちのようすは変わらないという。

新住民の長柄さんたちは、地域の人たちにとって、なくてはならない存在である。ふつう、社員寮など企業関係の人々は地域の活動とは疎遠になりがちだが、生麦寮では一八人のメンバー全員がまちとのつながりを大切にしている。

「生麦には〝蛇も蚊も祭り〟など有名な行事がありますね。そうしたお祭りでは、いちばん重い蛇の頭の部分やお神輿をわれわれが担ぐんです。地元では若い人が少なくなっていますからね。こちらも、もちつき大会を開いたり、積極的に地元の人たちとコミュニケーションを図っていますよ」

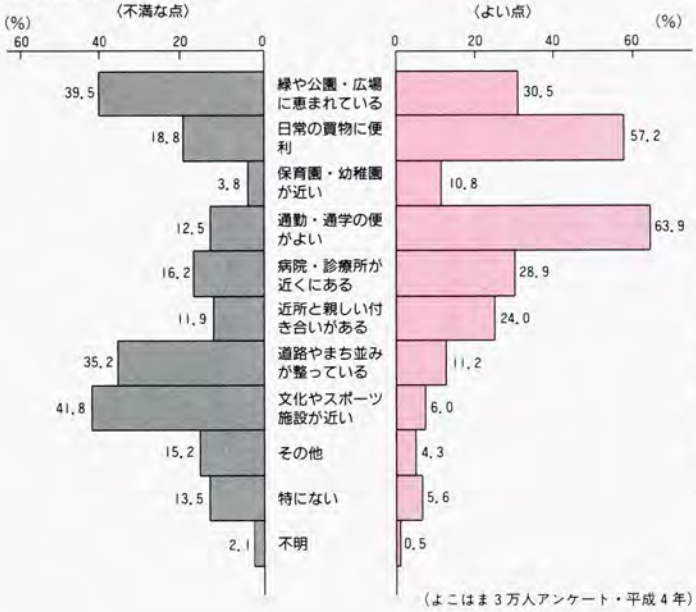
いまでは、会えば挨拶を交わす顔見知りもできた。

「ふるさとを離れ、高校・大学と都会に移り住んできて、つい忘れかけていた地域のつながりということを、生麦に来て思い出しました」という長柄さんは、いつの間にかこのまちにしっくり溶け込んでしまったようだ。

だが、生活者の目でこのまちを見ると、やはり問題はある。第一京浜国道が生麦のまちを横断しているため、排気ガスの影響で空気があまり良くないこと。公園など子どもが安心して遊べるスペースが少ないこと、人とのつながりはあっても、そこに住む人々の生活にうるおいを与える文化的な要素が不足していることなどを、長柄さんは指摘する。新住民にとっては、職住近接の便利さだけで住み続けるには、つらい面もあるようだ。

間もなく長柄さんは伴侶を得て、このまちを出る。新居は同じ横浜市内。「そこも古いまちですが、今度もいいところのようです」と、幸せ一杯の笑顔で語ってくれた。

●鶴見区のよい点・不満な点



（よこはま３万人アンケート・平成４年）

第2章

まちに住む

伝統をベースに新たな感覚をプラスしたまちを

❖南区／弘明寺商店街

笹川邦義さん(47)

観音様のお膝下、弘明寺商店街。往時の勢いを失いつつあるいま、新たな魅力を産み出して再起を図ろうとしている

すごくおいしく、少し大きくが商売のコツ

「南区はどんなまちだと思いますか?」。区民へのこんな質問に、返ってきたのは「庶民的・下町情緒・人情味」あふれるまちという圧倒的な声だった（昭和六十三年「区民意識調査」）。そうした〝南区らしさ〟を代表するまちのひとつが、観音様で有名な弘明寺とその界わいである。

その中で「これからは、もっと特徴のある、若い人も呼べるようなまちにしていかなくては」と、古さをまちの個性として生かしながら、新しい発想をつけ加えた商店街づくりを模索しているのが、和菓子の店「盛光堂」二代目、笹川邦義さん。

お寺の文字通り足元にある弘明寺商店街は、なつかしい雰囲気を持った門前商店街だ。盛光堂は、地下鉄弘明寺駅前のその商店街のアーケード入口脇にある。

創業は昭和六年。当時、弘明寺は門前こそ活気にあふれていたが周囲はまだ田圃の農村地帯だった。しかし、創業者の笹川一似さんはまちの将来性に賭けたようである。

横浜のお菓子屋さんの団体、横浜菓子協議会の初代会長を務めた一似さんは、創意と工夫で知られた人。当初は団子と大福が専門だったが、それらを大型にして、他店と差をつけた。薄利多売である。おいしくて、しかも、ちょっと大きい。評判は広まり、盛光堂は大いに繁盛したという。

戦災をまぬがれた弘明寺商店街は、市内中心部の商店街が接収などにより回復が遅れていたこともあって、戦後は大変な賑わいをみせた。昭和三十年にはアーケードも完成し、南区最多の店舗数を誇る商店街として活気にあふれた。盛光堂も忙しい日々を送る。

弘明寺と南区の西部に広がる新しいまちをつなぐバス

●まちの名の由来●

弘明寺…町内にある弘明寺にちなんで名付けられた。『新篇武蔵風土記稿』の「弘明寺村」の項に「この村、弘明寺観音の梵刹ありしによりかく名づけり」の記録がある。

古いまちの良さに現代をプラスする

邦義さんが盛光堂を訪れたのは昭和四十二年。二十二歳のときだった。和菓子職人が一人前になるのに五年はかかる。十八歳のときに仙台から上京してきた邦義さんは、東京の和菓子店で厳しい修業を積んだあと、横浜に来た。その横浜で、盛光堂という願ってもない職場に出会う。

「職人がたくさんいる店では〝一本仕事〟といって、一工程の流れ作業しかさせてくれないんですね。ここでは、和菓子づくりの最初から最後まで、すべてを任せてくれましたから」

店主の一似さんも、先輩の職人さんも、いい腕をしていた。丁寧で、しかも早い。

「仕事の〝盗みがい〟もありました」

故郷のまちに似た、素朴で人情味あふれる人々が住むこのまちも気に入った。

邦義さんがその腕を見込まれ、一似さんの長女貴余江さんと結婚、盛光堂の二代目を継ぐことになったのは、昭和四十七年で

弘明寺商店街に構える盛光堂本舗
上の写真は昭和７年の同店

伝統の味を受け継ぐ笹川さん

ある。平成三年に初代が亡くなったあとは、店は貴余江さんにまかせ、職人さんと二人で初代から受け継いだ味を守っている。

しかし、時代の波は、邦義さんが伝統的な和菓子づくりに安住することを許さない。

菓子の種類の増加や嗜好の変化などにより、和菓子の売行きは落ちている。商店街の一員として、お隣の上大岡の再開発の影響も心配だ。

弘明寺は昔、市電の終点という市内交通の要であったことから、多くの人々を引き寄せてきた。しかし、地下鉄が横浜から上大岡まで開通し、市電は廃止。上大岡が新しくこの地域の拠点となったため、弘明寺商店街は往時の勢いを失いつつある。

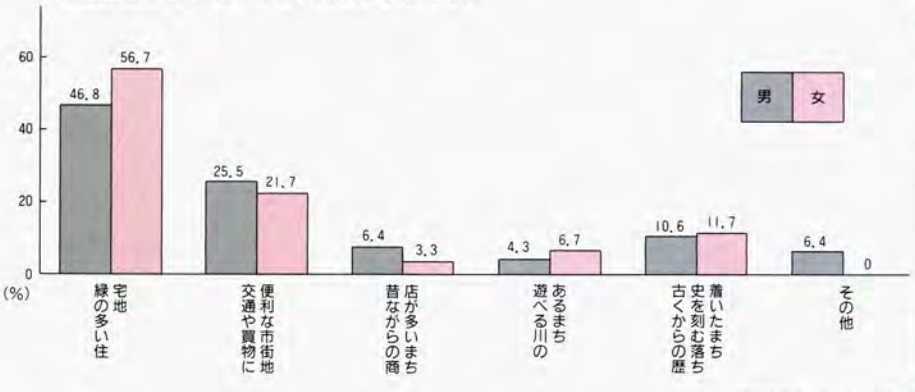
そんな商店街の現状をにらみながら、これからは若い人の嗜好にも応えられる和菓子づくりをと、邦義さんは新たな挑戦に意欲を燃やす。そして、三代目には、新しい「創作和菓子」にも取り組んでほしいと願っている。

市電は消えたが、弘明寺口からは南永田団地や横浜パークタウン方面へのバスが走っており、弘明寺はいま、南区の西部に広がる新しいまちへの拠点になろうとしている。弘明寺商店街の役割は、これからが再本番なのだ。

邦義さんがいう「創作和菓子」とは、新しい弘明寺のまちの姿をも指している。商店街は常になんらかの「新しさ」を内包していなければならない。その魅力が、人々をまちに引きつけるのだから。そのためには、単に伝統を強調するのではなく、それを現代的にアレンジして、人々の心のニーズに応えられるようなものにしていかなくてはならない。次の世代に邦義さんが期待するのは、下町の魅力を生かしながらも、新鮮な味のするまちづくりだ。それができれば、近隣の若者たちの足も、自然に弘明寺に向かうようになるだろう。

弘明寺商店街と盛光堂の今後の成功は、ひとえにそれぞれの創意と工夫にかかっている。

●2010年頃の住環境として、どんなものが望ましいですか



（南区区民アンケート・平成4年）

●職人の職業意識
仕事が充実していると思える理由はなんですか　(%)

ものを創り出す喜びがある	71.6
経営が安定している	41.2
専門的な仕事に誇りが持てる	72.1
伝統技術の継承に誇りが持てる	58.9
技能をみがき、上達することに喜びを感じる	69.2
創ったものが人々の役に立つことに喜びを感じる	78.1
人に使われることなく自分の意思で仕事をすることができる	75.1

（横浜市技能職実態調査・平成３年）

第2章

まちに住む

学生街に掲げた理想の灯

まち

❖港北区／日吉

喜多不二麿さん(76)

慶応大学は日吉駅のすぐ前。学生はまちを通らず、校門にすいこまれていく

学生街でありながら、人影がまばらな日吉のまち。買い物は渋谷、横浜などですませているようだ

●まちの名の由来●

日吉…昔、字宮前にあった日吉（山王）社に由来する。日吉は近江国（現、滋賀県）の官幣大社日吉神社の分霊で山王権現ともいう。

学生下宿のいま・むかし

「学生の住まいは、いまやアパートやワンルームマンションが全盛。昔ながらの学生下宿スタイルは、個人の空間やプライバシーが保ちにくい、大家さんとの関係が煩わしいなどの理由で最近の学生には敬遠され、すっかり減ってしまいましたね」

東急東横線日吉駅周辺には、学生向けのアパート、ワンルームマンションが数多く建ち並んでいる。駅へも大学へも、歩いて数分の場所で、女子学生向けの学生下宿「ライジング・サン・フジ・ガーデン芙蓉ハイネス」を営む喜多不二麿さんは、昭和三十年以来、日吉で学生たちの生活を見守ってきた。

東横線沿線の開発は、大正時代、英国のガーデン・シティをモデルに渋沢栄一らによってつくられた田園調布に始まる。以後、〝第四山の手〟として発展するこの沿線の日吉に、昭和初期、〝郊外の緑〟にかわって〝学園〟をまちづくりの核にしようとする電鉄会社の誘致によって、慶応義塾大学日吉校舎が誕生。港北区の農村地帯は、実業家や会社員、学生の住むまちとなる。

芙蓉ハイネスは、鉄筋五階建て、全室バス・トイレ付きで、家賃は七万円。八畳のスペースにベッド、机も備えつけてあり、全部で十三室。以前は喜多さんの住宅の空き部屋を提供していたが、平成元年にいまの建物を建てたそうだ。

学生下宿を始めたのは、息子さんが慶応大学に通いやすいようにと、現在の場所に家を建てたのがきっかけという。当時、この辺りは畑の中に家がまばらにある程度で、下宿が不足していた。そこで喜多さんは、空いていた部屋を貸し始めたのだ。最初は「六畳一間のみで、家賃は賄い付きで月千円。食事はみんなで一緒。粗末なフトン、

●自宅外生の住まい

(%)

	昭56	61	平元	2	3
寮	9.6	10.7	7.9	7.5	9.5
下宿	40.3	31.9	20.1	16.7	13.8
アパート	32.3	37.8	41.1	45.6	46.4
マンション	2.9	10.1	22.5	23.5	23.0
会館寮	2.8	1.4	1.3	1.0	1.5
賄い付き	8.9	6.1	5.3	3.7	4.1
その他	1.9	1.3	1.4	1.5	1.3

（全国大学生活協同組合連合会）

学生下宿とはいえ整った設備のライジング・サン・フジ・ガーデン芙蓉ハイネス。右は昭和三十年頃の喜多さんの下宿。時代の変化を感じさせる

食卓のおかずも質素と、いまの生活水準では考えられない生活でしたよ」と当時を振り返る。

クーラーと不真面目学生おことわり

かつて、地中にある有限の鉱物をむやみに掘り出す仕事に疑問をもって、勤めていた鉱物資源会社を辞め、実家で農耕生活を送っていたこともある喜多さんにとっては、自然と調和しながら質素な暮らしを営む生き方が理想だ。芙蓉ハイネスには、そんな喜多さんの理想主義が色濃く反映している。

勉学に励む学生には協力したいという喜多さんは、不真面目な学生には部屋を貸さない。芙蓉ハイネスは設備としてはワンルームマンションだが、学生下宿のスタイルはいまでも守り続けている。入居希望者に対しては保護者同伴で面接を行い、喜多さんの趣旨に沿わない人は入居を遠慮してもらう。人間の身体には適応しないからとクーラーは禁止、門限は十一時と、いまの学生にとっては厳しい条件付きだが、部屋はいつも満室という。

「いまの学生は勉強しなくなったとよくいわれますが、中には真面目に勉学に取り組むしっかりとした学生もいます。面接時に勉学への意欲を強く感じた人には、無料で部屋を貸しているんですよ」

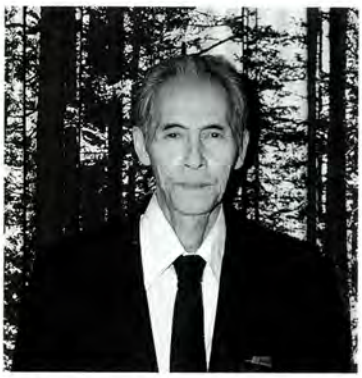
週に一度、そのためにつくった屋上のサンルームで、一緒にお茶を飲む機会をつくって相談相手になったり、要望を聞き入れたりするなど、間借りしている学生たちとのコミュニケーションも絶やさない。

かつて主流だった学生下宿は、日吉にアパートが増えはじめた昭和五十年頃から急速に減っていった。ひとつには学生のライフスタイルの変化もあるが、卒業したらそれっきりという近年の学生気質に、大家さんが嫌気がさしたという面も強い。

学生たちは一日の大半をキャンパスの中で過ごし、買い物や遊びは渋谷や横浜へ出てしまう傾向がある。だから日吉の駅前は、数千人の学生が通うまちにしては店の数が少ない。

自分の住む地域との接点は下宿先の大家さんだけという学生たちのためにも、喜多さんは学生たちとのコミュニケーションを途絶えさせたくないという。そして、学生たちが思索と息抜きのバランスがとれた学生生活が送れるようなまちづくりを、この日吉に期待している。学園都市にふさわしい文化の集積が感じられるような、そんなまちの実現のためにも、喜多さんは学生とまちの接点の役割を続けていくつもりである。

卒業した学生とも末永く付き合いたいという喜多さんのもとには、毎年、この下宿から巣立っていった人たちから年賀状が届く。その数は実に一八〇通を越えるそうだ。



質素な生活、そして高邁な思索とバランスのとれた人生をめざすことがモットーの喜多さん

●自宅外生の住まいの設備

(%)

	昭56	63	平3
机	13.9	35.3	64.2
本棚	6.0	40.1	78.6
食器棚	2.8	36.8	71.2
収納タンス	10.0	35.4	74.4
ベッド	14.9		44.2
エアコン・クーラー	1.1	16.8	37.4
冷蔵庫	3.2		88.1
給湯設備			67.6
TEL回線			81.3
電話機			82.1
ロフト			6.3
BSアンテナ			12.6

(全国大学生活協同組合連合会)